6 月第 4 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 6 月 25 日（日）10：30－11：30　聖霊降臨節第 5 主日
■説　教： 保科けい子 牧師
■説教題：「 手引きしてくれる人がなければ 」
■聖　書：使徒言行録 8 章 26～40 節（新約 p228～229）
■讃美歌：17「 聖なる主の美しさと」
　　402「 いともとうときイェスの恵み 」

本日も、使徒言行録をご一緒に読んでまいりたいと思います。何度もお話ししていますが、使徒言行録には聖霊降臨という出来事によって誕生した初代教会の様子が記されています。そこには、聖霊の働きがどれほど力強くなされたかが描かれているのです。先週取り上げた 4 章にも、エルサレムで弟子の数が非常に増えていったことが具体的に描かれていました。そこから、やがてキリスト教はイスラエルの周辺世界に広がっていきます。短期間で信者の数が爆発的に増えてきた初代教会は、集っている人々が持ち物を共有していたと言われていますから、日常の様々なことで混乱が生じてきたようです。そこで、12弟子に次ぐ存在として、教会に集う人々の世話をする為に「“霊”と知恵に満ちた評判の良い人」7人を新しく選び出したことが6章3節に記されています。彼ら新しく選ばれた7人もまた、単に日常生活の世話をするだけではなく、御言葉の奉仕をも担ったようです。その中の一人に、本日の聖書箇所8章26節から40節に登場しているフィリポもいました。彼は、新しく選ばれた7人の中のひとりステファノがエルサレムで殉教の死を遂げた後に起った迫害を契機に、サマリアの町へと下っていき伝道をしていました。

そのフィリポに主の天使が語りかけ、新たな伝道へと導いていきました。エルサレムからガザへと南へ下る寂しい道を行けというのです。そこで彼は一人のエチオピア人に出会いました。このエチオピア人について27節では、「エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していたエチオピア人の宦官」と記されています。宦官とは、中国の歴史などにもよく出てきますが、去勢された男性で、女王や王の周囲の女性たちに仕える働きをしていた身分の高い人でした。27節の終わりから28節によると、「エルサレムに礼拝に来て、帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた」と記されています。アフリカのエチオピアからエルサレムへの旅は、馬車を使用したとしても困難を伴う長旅でした。彼はそんな大変な旅をしても、エルサレムの神殿に詣でて礼拝をしようと思ったのです。彼はユダヤ人ではない外国人、すなわち異邦人です。異邦人がエルサレムの神殿で礼拝をしようとする時、そこには厳しい隔ての壁がありました。当時のエルサレム神殿は、ヘロデ大王が大改築をほどこした壮麗なものでした。その周囲には回廊をめぐらした広い庭があり、「異邦人の庭」と呼ばれていま

した。異邦人はこの庭までしか入ることができなかったのです。それだけではなく、彼はどんなに真面目に熱心に求道をしても、宦官であるという現実によって、ユダヤ教に改宗して主なる神様の民に加えられたいという願いはかなうことがありませんでした。そこに、彼の深い嘆きと悲しみがあったと思います。だからこそ、エルサレムを離れるに当って彼は、莫大なお金を出して聖書を手に入れたと思われます。私たちは今、お金を出せば聖書をすぐに購入することができますし、教会に来れば備え付けの聖書を読むことができます。しかし、この当時の聖書は羊皮紙という高価な紙に一字一字手で書き写したものであり、大きな巻物でした。ですから、聖書を自分のものとして持つなどということはよほどの大金持ちでなければできなかったのです。彼はそういう買い物をして、聖書を持って帰国の途につきました。そして、自分自身が直接神殿に入って礼拝することができないがゆえに、なおさら主なる神様を真剣に求めていたのでしょう。帰りの道々、馬車に揺られながら聖書を読んでいたのはそのような事情があったからだと思われます。

フィリポが天使の導きによって（それは聖霊の導きでもあったのですが）、彼の馬車に走り寄ったとき、彼が朗読している声が聞こえてきました。8章32節33節によるとイザヤ書53章の7節と8節であることがわかります。その聖書箇所を熱心に読んでいる彼に、フィリポは「**読んでいることがお分かりになりますか**」と声をかけました。宦官は「**手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう**」と言って、彼を馬車に乗せ、傍らに座らせました。こうして、フィリポによる聖書の説き明かしが始まります。宦官はこの聖書箇所についてフィリポに、「**どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか**」と質問しました。この箇所には、屠殺場に引かれていき黙って毛を刈られる羊のように、苦しめられ裁きも行われずに殺されていく人のことが語られています。イザヤ書の中で「主の僕の歌」あるいは「苦難の僕の歌」と言われているところです。フィリポはこの問いに対して、「**聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた**」とあります。つまり、この箇所で苦しめられている人は主イエス・キリストのことだ、と明確に答えたのです。この箇所でフィリポがしている伝道は、聖書の御言葉の説き明かしであり、それのみです。このフィリポもまた、使徒言行録の２章から描かれているペトロやヨハネと同様に、聖書について専門的に学んだ律法学者でもなければ祭司でもありませんでした。けれども、使徒言行録6章5節に「**信仰と聖霊に満ちている人**」と記されているように、聖霊降臨の出来事によって力を与えられて新しい歩みへと選ばれた人でした。

この聖書の説き明かしを聞いた宦官は、それまで彼が熱心に求めながら与えられなかった救いが、少し前にエルサレムで十字架に架けられたイエス・キリストにこそあるこ

とを示されました。彼が願いながらもどうしても乗り越えることができなかった隔ての壁が、主イエスによって乗り越えられ、彼のような者をも救いへと招いて下さっていることを知ったのです。ですから彼は水のある所に来ると、フィリポに「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」と願い出ました。その後の37節は、✝マークが記されているように、有力な写本に欠けているので今は本文から外されています。しかし、272頁に記されていますので読んでみましょう。「フィリポが、『真心から信じておられるなら、差し支えありません』と言うと、宦官は、『イエス・キリストは神の子であると信じます』と答えた」。この部分は、古代の教会で洗礼式が行われた時の誓約の言葉から来ているのだろうと考えられています。つまり、使徒言行録の本文よりも後の時代に記されたものであるということになります。けれども私たちは、彼はこのようにして主イエスを信じる信仰を与えられ、それを告白して洗礼を受け、キリストに連なる新しい神の民、教会に加えられたということを受け止めてまいりましょう。「彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかった」と39節にあります。彼に聖書を説き明かし、洗礼を授けたとたんに、フィリポは彼の前からいなくなったのです。しかし、彼は「喜びにあふれて旅を続けた」とあります。洗礼を受け、主イエス・キリストの父なる神様の民に連なる者とされた者は、聖霊によってその歩みを導かれているのですから、喜びにあふれてこの世の旅路を続けていくのです。本日の箇所でもまた、使徒言行録の著者は、聖霊の働きがどのようなものであったかを具体的に語っています。私たちもかつては、一生懸命に聖書を読んでもその御言葉の意味がほとんど分からなかったのです。しかし、礼拝の中で御言葉を聞き続けているうちに、聖霊が私たちを導き支えて手引きしてくださる経験をし、少しずつ目が開かれてきたのです。私たちはそのことに感謝し、やがては御言葉を手引きするものへと変えられていくことを信じて歩み続けてまいりましょう。